

第45回 グルメと災害

IT生

瀬戸内国際芸術祭が始まるにあたり取材にいった。

高松が拠点となっており、瀬戸内の12の島に現代アートが展示され、来場者は、連絡船によって、瀬戸内の風景のなかをぬって、会場に足を運ぶ。そうした類をみない芸術祭が「地域の復権活動」として世界中から注目されている。



現代アート（小豆島）の後方にみえるおむすび山は地殻運動で隆起したマグマが風化してできた。おむすび山になるほど風化しなければ高松の屋島や小豆島のような台形として残っている

2010年に1回目から取材しているのだが、当時から、「芸術もいいけど、津波が来たらひとたまりもないな」と心配していた。そうしたら、今回の芸術祭のガイドブックの冒頭の企画で「瀬戸内の食がおいしい理由」という対談記事というのが掲載された。アーティストと神戸大の火山の専門家、巽好幸氏との対談で、讃岐名物のうどんのいりこだしの小魚いりこは、花崗岩が風化した砂地に集まりやすい。そうした砂地にはサワラやフグも産卵にくる。鯛やおこげが好む磯浜になりやすい、という話であった。

なぜそのような、土地柄になったのかというと、南海トラフで日本列島にむかって潜り込むフィリピン海プレートと、列島をささえるユーラシアプレートがぶつかりあう地殻運動が継続されるなかで、1300万年前に、四国の中央構造線を境とした北側にある瀬戸内で、沈降と隆起が起きた結果、地中からでたマグマが、前述の魚にとって好都合な生息環境を生み出し、われわれは恩恵をこうむっているという話だった。

「津波に備えよ」という記事ではなかったが、世界中から瀬戸内の風景と食を楽しみに集まってくる理由を知ること、自然の恵みと自然の試練が裏腹であるということ、多くの人に考えさせる良い企画だったと思う。

本欄の読者の方々にもぜひ、一度、足を運んでいただきたいと思う。情報は、ウェブサイト「瀬戸内国際芸術祭2019」で。

(平成31年4月)